

講演 4

「ミャンマーにおける食料・農業経済の現状」

イエジン農科大学（ミャンマー）

博士 Hnin Yu Lwin 氏

皆さん、こんにちは。イエジン農科大学のLwinと申します。

本日は、「ミャンマーにおける食料・農業経済の現状」について、このような発表の機会をいただきまして、皆さんに感謝しています。

早速ですが、これから発表の内容に入りたいと思います。

まずはミャンマーの地理について紹介します。ミャンマーから見ると中国、ラオス、タイなどは東方にあり、インドとバングラデシュは西方にあります。ミャンマーの隣には大きな国があって、影響をたくさん受けています。

次に、ミャンマーにおける農業の役割について紹介します。

ミャンマーは農業の国であり、ミャンマーの農業部門は国の経済の支柱となっています。農業部門においては、農業産出額は、2013年のGDPの22.5%であり、輸出総額の20%であります。

ミャンマー農業の概況を見ると、はじめに、全ての国民への国内消費および高栄養価獲得のための食料安全保障の実現。2番目は、農家所得の増大および農家の社会経済的地位の改善。最後には、国際市場で競争力を持つための農産物の品質および規格の改善をビジョンとして掲げております。

次に、ミャンマーの農業政策について紹介します。

1988年以降、ミャンマーは市場志向経済体制を採っており、農家には作物栽培・生産におけ

る選択の自由が認められています。

ミャンマーの耕作地・土地政策を紹介します。

1988年前、前といっても独立の後、1953年、ミャンマーの耕作地・土地は国有化になりました。国有化というのは、耕作地・土地全部を国が持つことです。農家は耕作権だけもらいます。ですから、売ることはできません。売り買いはできません。しかし譲り受けることはできます。親から子どもに受け継ぐことはできます。

その国有化の影響で、もう一つは、耕作地にはマメしか栽培できないのです。そういう政策になりましたが、1988年以降は緩和され、農産物の栽培は自由が認められています。しかし、土地は変えられません。コメを栽培している土地ならば、農家はコメだけ栽培しています。

そして、ミャンマーは2003年、コメ政策の自由化に踏み切りました。コメの自由化については、後ほど説明します。

1988年から2014年にかけて、240件のダム・貯水池プロジェクトが完結し、灌漑地の総面積は102万ヘクタールから、213万ヘクタールに増大しました。2011年の新政策形成以降、政府は農業開発を支援するため、農産物輸出税の緩和および農業投入資材の輸入税の免税に着手しました。

政府は、農家の作物生産への投資を促すため、信用供与を行っています。コメの信用状為替相場も、2013年から2014年にかけて、1エーカー当たり2万ミャンマーチャットから、10万ミャンマーチャットに増加しています。今年の雨期

には、1エーカー当たり15万ミャンマーチャットに増大する予定です。

2016年4月から、農業灌漑省は、農業畜産灌漑省に再編されています。

次は、ミャンマー農業畜産灌漑省の概要について説明します。

同省の主な機能としては、①食料の自給と栄養の確保、②高生産性種子の生産と供給、③農業教育・訓練の提供、④研究・開発活動などを行っています。主な機能はその4つです。新しい政府はいろいろ外国の組織と話し合っており、最近では有機農業を政策に入れようと、その主な機能に入れようという話が出ましたが、まだ入っていません。

次に、ミャンマーにおける土地利用について説明します。

合計6700万ヘクタールの中で、耕作地は1100万ヘクタールであり、割合としては17%です。

また、耕地面積と生産量を作物別に見ると、主な作物は穀物、油糧種子、マメ類で、それぞれ総耕地面積の40%、16%、21%であります。

耕地面積のトレンドを見ると、増加の傾向が見られます。特に、1995年から2010年までの増加は、夏のコメを栽培するプログラムの影響からであります。

次に、コメの生産量および輸出量の推移を見ます。

2013年には2800万トンの生産量があり、119万トンを生産しました。

2003年以前は、コメの国内の流通および輸出も国が管理していました。2003年からコメの流通自由化が進められ、2003年以降は民間から輸出することができるようになり、輸出量は増大しています。

マメ類の生産量を見てみます。マメ類は2番目に多い生産量です。約600万トンの生産量で、100万トンを生産しています。

油糧種子は、2011年に市場の開放をしました。市場の開放により、輸出量は明らかに増大して

います。

次に、野菜生産量の内訳を見ますと、トマト、キャベツ、カリフラワーを主に生産しています。

次の円グラフは、果実の生産量の内訳です。マンゴーを多く生産しています。

農業投入について説明します。灌漑地を見ると、耕作地に占める灌漑地の割合は16%であり、中国と比べたら少ないです。

次に、種子です。農業灌漑省が品質のいい種子を作って、その種子を農家に配ります。コメは2300トンで、最も多く農家に配っています。

種子生産に関わる民間企業では、ハイブリッド米や野菜種子を中心にしています。

次は、農業融資について説明します。コメ農家に対する融資が多いのは、コメ政策によるものです。次の表は、1月から12月までのコメの価格変動です。雨期である7月から9月にかけての間はコメの価格はいつも上がっています。この時期は、ミャンマーではコメを栽培しているところで、収穫はないので上がっています。収穫するときは、コメの価格は下がります。そこで問題点があります。

前のスライドで説明しましたが、コメ農家は国から融資を受けられます。でも、返却の期限は収穫の時期になっています。それで農家の人たちは、その融資の返却のため、低い価格で収穫したコメを販売しなければなりません。

次に、農産業について紹介します。

農産業は民営化をしていますから、2001年と2013年を比べると、国が管理しているものは減っています。農産業はほとんど今、民間が管理しています。

次は畜産物の生産です。鶏肉を最も多く生産しています。牛肉、羊肉がなぜ少ないかということ、宗教的な理由です。牛肉と羊肉の消費量が少ないので、生産は少ないのです。

次に、ミャンマーの貿易について詳しく説明します。

お手元の資料とは数字が少し違います。配つ

たものは2014年12月ですが、こちらのスライドは2013年のデータを使っています。2013年の輸出額は、約12億USドルであります。

ミャンマーにおける主要な輸出品は、油と天然ガスです。ほかの輸出品は、コメ、野菜、木材、水産物、衣服、天然ゴム、果実などです。主要な輸出相手国は、中国、インド、日本、韓国、ドイツ、インドネシア、香港です。

ミャンマーの主な輸入は、燃料、植物油、輸送機関、薬品、建設機械、ポリマー、タイヤ・機械であります。主要な輸入相手国は、中国、日本、インド、インドネシア、ドイツ、フランス、香港です。

ミャンマーの農作物の輸出額は10億USドルほどです。2013年は、畜産物および水産物を含めると、農産物の輸出額は約12億USドルであります。

農作物の輸出額を見ると、コメが一番多くなっています。

次に、家畜および畜産物・水産物の輸出について説明します。ほとんどの輸出は皮革製品であります。皮革製品だけ輸出が伸びています。漁業における輸出量を見ると、魚類とエビが主な品目です。

次に、日本とミャンマーの貿易を見てみます。日本からは高いものを輸入しています。日本の主な輸出品は自動車です。ミャンマー人は日本車が大好きなんです。それから、建設用機械、合成繊維織物です。ミャンマーから日本に輸入しているものは、エビ、ゴマ、マメ類、真珠、履物などです。

次に、ミャンマー食料部門の経済概要について説明します。1人当たりGDPは、1200USドル程度と極めて低い貧国です。2011年には、幾つかの食料安全保障上の課題があったにもかかわらず、ミャンマーは世界における「食糧剰剰」国の一国として定義付けられています。年間5500万トンから6千万トンの農産物が生産されています。基礎食料の点では、ミャンマーで

は現在、食用油が不足しています。

農業に基礎を置いた付加価値食品を見てみます。

ミャンマーで生産され、国際基準に適合する食品の安全性を高めるためにも、最新技術を活用することの必要性は明らかです。ミャンマーでは、農家は通常、生鮮原材料として農産物を販売しています。農場から小売にかけてのフードチェーンの創造は、避けられないものであります。

ここで、ミャンマーの伝統的なお菓子を紹介します。コメを使った伝統的なミャンマーのお菓子です。こちらは輸出はできません。ミャンマーに來られたら差し上げますね。

次は、ミャンマーにおける農業戦略です。ちょっと課題は大きいですが、戦略としてはいろいろな解決の方法があります。その中で、より重要と思われるものだけを話します。

効率的システムの確立といえ、前に説明しました投入資材（種子、化学肥料、機械等）、クレジット、農家のために購入価格の保障、作物・気候に対する保険などが必要です。

農業サプライチェーンにおける投資機会を見ると、農業資材産業は、種子、農業化学（肥料、農薬）、農業機械産業、あと灌漑技術産業は用水・節水のための技術などは必要と考えられます。

食品製造・加工業は、プランテーションも必要ですし、食品加工業も必要ですし、研究・開発も頑張らなければならないと思っています。

もちろん、卸売市場産業も必要な産業であります。

結びとしては、ミャンマーの農業開発は、食料安全保障の観点からだけでなく、農家所得や国のGDPを含めた1人当たり所得の増大においても、極めて重要な要素であります。農業の生産性向上は、ミャンマーにおける貧困緩和や経済成長において、極めて必要性が高いのです。

技術は、ミャンマーの加工企業にとって不可

Hnin Yu Lwin

欠であります。研究・開発もまだまだです。農村所得改善に向けたサプライチェーン・マネジメントが必要とされています。ミャンマーの経済は新興国経済であり、初期段階の開放市場経

済は、その絵を捉えようと試みています。

私の発表は、これで終わります。ご清聴ありがとうございました。

(講演 4 : 終了)